

爪の変化

東皮フ科医院院長
東 禹 彦
(聞き手 山内俊一)

爪の変化についてご教示ください。

1. スプーンネイルは鉄欠乏性貧血のみの身体徴候でしょうか。
2. ヘモグロビンが十分に合成されないと、なぜ爪に特徴的な形態が起きるのでしょうか（他の臓器の変化も含めて）。
3. 爪の肉眼的所見に関する最近の知見について。

<島根県開業医>

山内 東先生、爪の変化は非常に身近な話題ですが、まずスプーンネイル、これは鉄欠乏性貧血のみの特徴でしょうか。

東 スプーンネイルというのは、鉄欠乏性貧血で見られるのは間違いないのですが、それにだけ生じるというものではありません。まず、鉄欠乏性貧血があるとスプーンネイルになるかという、患者の25%ぐらいにしか現れないという統計があります。

山内 我々がよく見るのはどうしても手の指の爪なのですが、足の爪もみなこうなるのでしょうか。

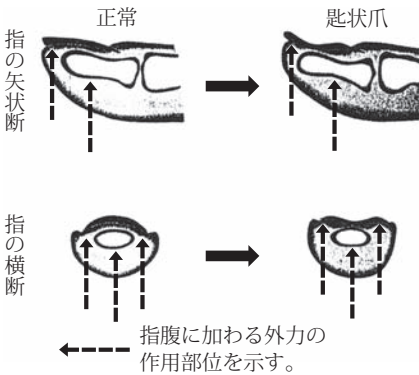
東 スプーンネイルについては、普通は手の指にしかほとんど起きており

ません。全身的な疾患、鉄欠乏性貧血も全身性の疾患ですけれども、それ以外の、例えば慢性の心肺疾患とか、バチ状指になるとか、こういう変化は全部の指・趾の爪に起きるのです。それから、例えば皮膚筋炎という病気がありますけれども、そのときには爪郭が赤くなるのですが、これも手と足と両方、全部の爪に起きるのです。ところが、スプーンネイルはそうっていないということです。

山内 そのあたりも含めて、どうして爪がスプーン状に変形するかというところですが。

東 スプーンネイルというのはたいいてい人指し指や中指、親指の爪に起き

図1 爪甲が匙状化する理由



東禹彦：爪—基礎から臨床まで、
金原出版、2004、P60図5-11より引用

るのですけれども、どうしてスプーン状になるかという話になると、これは指の構造、解剖学的な構造ですけれども、末節部は末節骨があるのですが、末節骨の一番遠位端は指の途中までしかないので。末節部の骨の幅はというと、爪より狭いのです。指にかかった力はどこが支えるかというと、末節骨が支えているのが多いのですけれども、それ以外の部分にかかった力というのは全部爪が支えることになるのです(図1)。ですから、結局よく使う指、親指、人指し指、中指によく起きるといことになるわけです。

山内 力学的な理由ということですね。

東 そうということですね。足の爪にはほとんど起きないのです。昔の報告

なのですけれども、南アフリカで、今は近代国家になっていますが、人力車が使われた時代があるようで、そのときには人力車の車夫の足の指の爪がスプーン状になっていた。それも経験年数が長いほどスプーン状になるという報告もありまして、スプーン状になるのは力学的な理由だろうというふうに考えています。

山内 今のお話で少しイメージはつきました。そうしますと職業等々でスプーンネイルになりやすい方というのがいるわけですね。

東 はい。ですから、指先を使う仕事ですね。例えば、いろいろなネジを指で締める仕事をしている人では、よく力のかかる指にスプーンネイルが起きるといことが報告されております。

山内 逆にいいますと、そういった仕事をしていないと、初めのお話のように、鉄欠乏性貧血だけでも爪の変形がないということが出てきますね。

東 はい。そういうことで、鉄欠乏性貧血があっても、指を使う仕事をしなければ、ならないということです。そそこが25%ぐらいいし起きない理由です。

山内 鉄欠乏性貧血で特に起こりやすい理由、これはいかがなのでしょうか。

東 これは実際にはよくわからないのです。ただ、爪の厚さがスプーンネイルになるかどうかに関係すると思う

のです。貧血の人の爪を見ると、何となく弱々しい感じを受けるのです。ですから、酸素欠乏ということになると思うのですが、そのために爪甲が丈夫につくられない。そういうことが考えられるのですけれども、爪の厚みを計測してくれた人はいないので、はっきりしたことは言えません。

山内 2番目のご質問になります。ヘモグロビンが十二分に合成されていない。これは、今のお話と関係するわけですが、酸素が欠乏すると考えてよるしいわけですか。

東 はい。そう考えております。

山内 ほかの臓器との関連ということのご質問もあるのですが、鉄欠乏性貧血で来るほかの臓器の変化と、何か特別一致するといったものは。

東 鉄欠乏性貧血でほかの臓器にいろいろ変化が起きるかということになると、内科的にはいろいろあると思えますけれども。

山内 貧血の程度、ヘモグロビンの濃度がどのぐらいまで下がると起きやすいといった目安はあるのでしょうか。

東 先ほどの25%というのは、これは重度の貧血の患者さんで調べられているのです。ですけれども、先ほど言いましたように、外からの力で起きる変化なので、重度でなくても、ヘモグロビンが9ぐらいでも、起きる人には起きるということになります。

山内 爪といいますと、いろいろと

患者さんから「ついでに」という感じでご質問を受けることが多いものですから、この際、爪の肉眼的所見に関して、最近わかっていることをおうかがいします。鉄欠乏性貧血というのは爪の厚さ、こういったものも絡むという話ですが、このあたり、もう少し詳しくお話しいただけますか。

東 鉄欠乏性貧血でスプーンネイルよりさらに多く見られる変化というと、爪の表面が雲母のように薄くはがれるという変化がありまして、爪甲層状分裂というのですけれども、こういうものがよく見られるのです。これはあまりそういう力仕事をしない人でも現れるということがわかっておりますので、こちらのほうがもっといいサインになるのではないかと私は考えておりますけれども、なかなか昔からいわれている説を覆すのは大変なのです。今の層状分裂というのも、やはりよく使う指に起きやすいのは起きやすい。これは多分爪の水分含量の低下が関係していると思えます。

山内 爪がはがれやすいというのはよく耳にいたしますが、鉄欠乏性貧血がない状態の方ですと、どういったものが考えられるのでしょうか。

東 洗剤を使って水仕事をたくさんする人とか、マニキュアの除光液をよく使う人で起きやすいですね。

山内 マニキュアではなくて、それを取り除くほう。

東 取り除くほうにアセトンなどが入っていますので、水分を取ってしまうのです。

山内 マニキュア自体はどのようなのでしょうか。

東 マニキュア自体は、爪の上に膜をつくれますので、厚く塗れば爪を丈夫にするという効果もあります。

山内 むしろ保護するかもしれないということですね。

東 そうということですね。

山内 逆に、爪が分厚くなる病気というのは。

東 いろいろな病気があるのですけれども、全部の爪が分厚くなる病気として、少し黄色っぽくなって起きてくる病気があります。黄色爪症候群といわれているのですけれども、これはほかにリンパ浮腫があつたりとか、胸水がたまるとか、そういうような症状があるのです。なかなか診断がつかなくて困る先生が多いような病気です。

山内 よく私ども、爪といいますと、服用中の薬で変化が来るとすることも耳にしますが、これはいかがなのでしょう。

東 今の黄色爪症候群もそれと同じような黄色っぽい爪になる人がありまして、リマチルという、プシラミンという薬で起きるといわれています。

それから、近年、いわゆる抗癌剤の影響で爪に変化がよく起きますけれども、出血とか、色がつくとかございます。

山内 それ以外に、例えば癌とか、あるいは感染症、こういったあたりはいかがなのでしょう。

東 癌の場合は、今言った抗癌剤の使用でそういうものが起こりますし、先ほどリマチルの話をしましたけれども、これは薬をやめると、わりあいすぐ治るのです。

山内 最後に感染症はいかがですか。

東 最近話題になったのは手足口病です。手足口病になると、爪に横線が入ったり、爪が脱落したりする人がたくさん出たのです。2～3年前から、地区によって違うのですけれども、大阪などは2011年にたくさん出ておまして、それはコクサッキーA6型で起きた手足口病の場合です。昔から別の原因で、エンテロウイルス71型とかコクサッキーA16型とかでは、そういう変化はほとんどなかったのです。2011年のA6型ではそういう変化が多かった。

山内 原因は多彩だということですね。

東 はい。

山内 どうもありがとうございました。